

☆ 聴覚障がいのある子どもの理解のために

聴覚障がいを理解するために、基本的な事項について、「障害のある子供の教育支援の手引」を参考にまとめてみました。



「聴覚障がい」とは

聴覚障害とは、身の周りの音や話し言葉が聞こえにくかったり、ほとんど聞こえなかったりする状態をいう。聴覚障がいの状態（聴覚障害の程度や聞こえ方、言語発達の状態）は、一人一人異なっている。



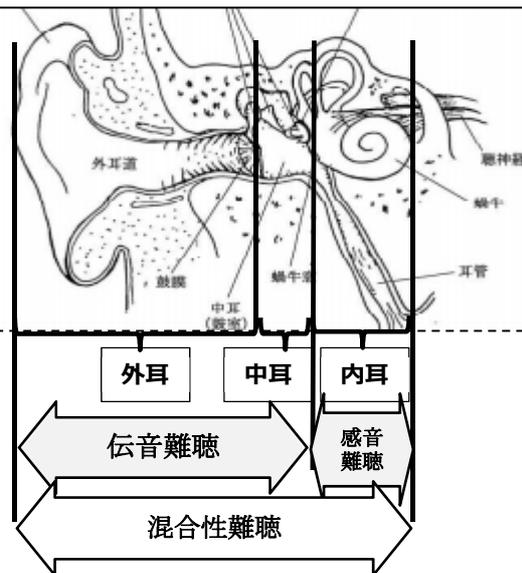
聴覚障がいの子どもの教育では、早期発見と早期からの教育的対応が極めて重要となります。早期からその発達に応じた必要な支援を行うことは、その後の子どもの自立や社会参加に大きな影響があります。

<主な障がいの分類>

聴覚器官は、**外耳、中耳、内耳、聴覚伝導路、聴覚中枢**からなっている。これらは、外界にある**音の振動を受け止め、これを内耳の感覚細胞まで送り込む作業をしている伝音部分**と、送られた**音の振動を感覚細胞で感じ、神経興奮（インパルス）に換え、脳幹の神経伝導路を通過して大脳の聴皮質に送る感音部分**に大別される。

図：「聴覚器官」

(障害のある子供の教育支援の手引より引用)



<障がい部位による分類>

聴覚器官のどの部位に原因があるかによって、**伝音難聴**と**感音難聴**に分けられる。また、感音難聴を末梢神経性（迷路性又は内耳性）難聴と中枢神経性（後迷路性）難聴に分けることもある。伝音難聴と感音難聴が併存するものを**混合性難聴**という。

一般に伝音難聴では、音が小さく聞こえるだけであるが、感音難聴では、音がひずんで聞こえるために言葉の音の明瞭度が著しく低下することが多い。

【障がいの程度による分類】

障がいの程度には、かすかな音や言葉を聞き取るのに不自由を感じるが日常生活には、ほとんど支障のないものから、身近にあるいろいろな音や言葉が全く聞こえないものまであり、その程度によって軽度難聴、中等度難聴、高度難聴及び最重度難聴に分けられます。障がいの程度を示す基準は、オーディオメータで測定した聴力レベル（dB：デシベル）で示され、正常聴力レベルは、正常音が聞き取れる最小の音圧で、オーディオメータの25 dB以下に当たります。

* 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「障害のある子供のための教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～（令和3年6月）P89～

【環境音や音声の大きさ】	(単位 dB)
深夜の郊外、ささやき声	0~20
静かな事務所、静かな(普通の)会話	30~50
静かな車の中	60
騒がしい事務所、大声の会話	70
セミの声	80
叫び声	90
電車の通るガード下、30cmの近くの叫び声	100
自動車の警笛	110
ジェット機の騒音、30cmの近くのサイレン	120

保護者から、「聴力は、80dBくらいです。」と聞いたら、「やっとせみの声の有無が聞こえる聴カレベル」など私たちがイメージできることは支援につながります。ただし、音や音声を感じ取る力(音の検出)と、音を聞き分ける力(音の弁別)、音の意味を理解する力は別です。また聞こえ方もさまざまです。

相手の話し方や騒音の有無などにも影響される聞こえ方
 聴覚障がいのある子どもの聞こえや話の理解は、聴カレベルや補聴器装用域値などの値だけで決定されるものではなく、相手の話し方や騒音の有無などにも影響されます。



【補聴器と人工内耳の違いが分からないのですが…】

補聴器は外からの音を増幅させる機器で、人工内耳は、内耳に埋め込んだ電極により、神経に直接音の電気信号を送る機器です。

補聴器

「補聴器」とは、音を増幅して話声の聴取を援助する機能を備えた携帯型の医療機器で、通常マイクロホン、電子回路、イヤホンで構成されています。外観上から、ポケット型、耳掛け型、RIC型、耳あな型、眼鏡型などに分類されます。

個々の聴カの状態に応じて補聴器の調整を行うことをフィッティングといい、適切なフィッティングを行うことは補聴器装用を行うための必要条件です。

人工内耳

「人工内耳」は、現在世界で普及している人工臓器の一つで、難聴があつて補聴器での装用効果が不十分である際に手術の適応となり得ます。一般的には、人工内耳を装用した状態で、20~40dB程度の装用域値が得られる場合が多いです。

人工内耳では手術で蝸牛に電極を埋め込むプロセスと、外部装置を調整して装用するプロセスが必要となり、手術前後には、医療機関、特別支援学校、療育機関、両親や家族の支援が重要です。



補聴援助機器について

補聴援助機器を用いれば、2.4GHz帯の無線通信を用いることによって、騒音や距離の影響を受けことなく補聴器や人工内耳に音や音声の情報を送ることができます。外部からの雑音が多い教室でも視聴覚教材の音源を無線通信で直接聴いたり、楽器音が響いている中でもマイクを経由して口頭指示を伝えたりすることができます。